

秋山幸子作 「87点」

- A子 いよいよ来週から中間テストね。またまた“恐怖の3日間”が迫ってきたわね。
- B夫 今度のテストは内申書に響くから頑張らなきゃな。おい中川、お前もう試験勉強を始めたか？
- 中川淳一 いや、まだだよ。この分で行くと、今度のテストも一夜漬けかな。
- B夫 でも世界史みたいな暗記物は、一夜漬けでもなんとかなるけど、数学はな…。
- C子 さあ、これで大体きれいになった。今日の掃除はこれくらいにして、と。あ、いけない、ゴミを捨てるの忘れちゃった。印刷室はほかの教室と比べると、すぐにゴミ箱がいっぱいになっちゃうんだから。中川君、悪いけど、ゴミ捨てに行ってきたらいい？ わたしたちはその間に、モップやほうきを片づけとくから。
- 中川 いいよ。
- ナレーション 中川淳一ら3人は、学校の印刷室の掃除当番でした。中間テストを来週に控えた彼らは、いつものように印刷室の掃除をしながら、来週から始まる試験について、いろいろ話をしていました。
- 中川 来週からいよいよ中間テストか。イヤだイヤだ。それにしても困ったな。今度の数学のテストで相当いい点取らないと大変なことになっちゃう。
- ナレーション 中川淳一は、数学が大の苦手でした。そのため彼は、数学のテストが近づくたびに頭を痛めていました。焼却炉に行ってみると、彼のほかにはだれも見当たりませんでした。何気なく彼が印刷室のゴミ箱の中のゴミを捨てようとした時――。
- 中川(モノローグ) 随分ワラ半紙を無駄遣いするな。たったこれだけの刷り損ねで捨てるなんてもったいない。そうだ、メモ用紙代わりに少しもらってこよう。あれ？
- ナレーション 彼がゴミ箱の中に捨ててあったワラ半紙をパラパラとめくっていくと、その中から、どこかで見覚えのある、数学の図形らしい印刷物が出てきたのです。
- 中川(モノローグ) これは確か、先週の数学の授業でやった「定理と証明」に出てくる図形じゃないか。一体どうしてこんな所に？
- ナレーション 彼が見つけた刷り損ねのワラ半紙には、上半分ではありましたが、確かにこの間の授業でやったばかりの数学の問題が印刷されておりました。しかも驚いたことに、その問題の一番上には、なんと「数学中間テスト問題」と書かれてあったのです。
- 中川(モノローグ) もしかすると、これは今度の中間テストの問題かもしれない。きっと、先生が中間テストの問題を印刷している間に出た印刷ミスで、うっかりゴミ箱の中に捨てたんだ。ほかにもあるかなあ。
- ナレーション 彼は、無我夢中でゴミ箱の中のワラ半紙を引っ張り出しました。一番下のほうから、今度はさっき見つけたテスト問題の下半分と思われるものが出てきました。
- 中川(モノローグ) あったあつた！ ということは、さっきのと、これとを合わせれば、今度の中間テストの問題全部が分かるってことだ。すごいぞ、こりゃ。
- ナレーション 彼は、思わぬ偶然によって手に入れた2枚の印刷物を重ね合わせ、一人驚くと共に。どこからとなく喜びの気持ちがわいてきたのです。
- 中川(モノローグ) やったぜ！ これで今後の数学のテストはおれのものだ。

ナレーション そう独り言を言った中川君は、一枚のワラ半紙を素早く自分のポケットの中に押し込みました。その晩、彼は、今日学校から持ち帰った数学のテスト問題を、自分の机の上に広げ、これをどうすべきか考えました。

中川(モノローグ) この問題は、別におれが盗んだわけじゃない。たまたまゴミ捨てに行った時に、偶然見つけたんだ。だからおれは悪くないんだ。それに、おれは人一倍数学が苦手だ。一度でいいから数学でいい点を取ってみたい。

ナレーション そんな思いに心を奪われ、彼は自分のしたことの、そしてこれからしようとしていることに対する善悪の見境を忘れ、手に入れた問題の解答を授業中のノートや参考書などで調べ始めました。そして、数学のテストのあるその日――。

先生 いいかみんな、今回のテストは、皆、最近授業の中でやったものばかりだ。授業中の話をしっかり聞いていれば、全問解けるはずだと思う。だから落ち着いて解答するように。ではテスト始め！

中川(モノローグ) しめた！ やっぱりあの問題だ。

ナレーション 中川君は、テスト用紙を見た途端、そう思いました。そして、昨夜繰り返し暗記した解答を、ずらすと解答欄に書き始めました。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション テストも終わり、次の数学の授業中――。

先生 では、この間のテストを返す。80点以上の者を発表する。川上 96点、矢野 92点、小林 88点、そして中川87点。

効果音 (クラスの驚きのガヤ)

先生 …以上。上位3名の者は、大体いつもの顔ぶれだが、今回は中川がだいぶ頑張ったようだな。中川、よく努力したな。これからもその調子で頑張るように。

ナレーション そして数学の授業のあと――。

A子 中川君、すごいじゃない、今度のテスト。あんな難しい問題、どうしてそんなにできたの？

中川 別にそんな大したことないさ。

C子 あら、「大したことない」だなんて。でも中川君、本当に頑張ったのね。

中川 うん、まあな。

B夫 おい中川、すごいじゃないか。数学の苦手なお前が、みんなの前で点数を発表されるとは。できない者のひがみじゃないけど、ちょっとおれには信じられないな。だって、証明問題は、普段数学のできないやつがちょっとそと勉強したからって、すぐできるようになるとはおれには思えないんだよな。

中川 (きつとなって)それ、どういう意味だ？

B夫 別に深い意味なんかないさ。ただ、急に中川が、中川らしからぬ点を取ったんで、信じられないだけさ。

中川 じゃ、まるでおれがカンニングでもしたって言うのか？

B夫 とうんでもない。そうは言ってないけど、でもそうカッコするところを見ると、なんだか怪しいなあ。

中川 何～！

山口孝夫 おい、二人ともよせよ！

ナレーション そう二人に呼びかけたのは、山口孝夫でした。

山口 さっきから話を聞いてりゃ、鈴木(B夫)、お前あんまりじゃないか。そんな言い方ってないだろう。中川は努力して、自分の実力で今度の点を取ったんじゃないか。それをなんの証拠もないのに、カンニング扱いして。

B夫 よっ、出ました正義の味方。さすがクリスチャン少年の言うことは違う。ご立派ご立派。

ナレーション そう、山口孝夫はクリスチャンでした。彼は、日ごろあまり成績がよくなくて次第に取り残されそうになっていく中川君を、何かにつけて励まし、助けていたのです。

その日の放課後——。

中川 山口、今日は悪かったなあ。

山口 いや、いいんだよ。中川に限らず、あんな言い方をされたらだれでも頭にくるよ。

中川 山口。実はおれ…。

山口 どうしたんだ？

中川 お前だから話すけど、鈴木が言っていたこと、実は本当のことなんだ。

山口 なんだって？ それは一体どういうことなんだ？

中川 実はおれ、印刷室のゴミ捨てに行った時、偶然、今度の数学のテスト問題を見つけちゃったんだ。一瞬どうしたらいいか迷ったけど、数学の最大の苦手はおれには、願ってもないチャンスだと思った。その日、その問題を家に持って帰って、ノートや参考書を見て解答を作って、それをテストの前日に暗記したんだ。

山口 本当か、それは？

中川 解答用紙に答えを書き終わるまでは、無我夢中で何も感じなかったけど、テストが終わってからというものは、不安と恐れと罪悪感で胸が締め付けられそうだった。その上、数学の授業で、自分の点が皆の前で発表されると、その思いはますます強くなった。自分で自分が恐ろしくなってきたんだ。さっき、鈴木に疑いの目で見られた時も、さも自分は何も悪いことをしていないように振る舞って。そんな自分がたまらなくイヤになった。山口、いったい俺はどうしたらいいんだろう？

山口 …そうだったのか。でもよく打ち明けてくれた。辛かったろう。確かに中川のしたことは悪い。焼却炉でその印刷された用紙を見つけた時に、何か正しい処置をすべきだったと思う。でも、そうは言っても人間は弱いものだからな。つい罪の誘惑に負けてしまうこともあるさ。やってしまったことは申し方ない。でも、人間はそのあとが大切だと思うな。

中川 どうすりゃいいんだ？ ほんとに、どうしたらいいんだよ?(エコー)

ナレーション 今日のドラマは、あのシューベルトの「未完成」みたいに、途中で終わりました。と言うより、「今も続いている」と言ったほうがいいのか、ラジオの前の君の中で——。人間の罪って、それをやってしまうまでは、自制心も何もなく突っ走って、終わったあとでじわじわと締め付けてくるという本当に怖い性質を持ってますね？ それはそんな思いに責めさいなまれて、思わず「どうしたらいいんだ?!」って叫んでしまう。そんな経験を君も持っていませんか？ 君が中川君ならどうするかな？ もし友人の山口君なら、どうやって導いてあげるかな？ このドラマの続き、リアルな体験を交えて、ぜひ君自身で作ってみてくれませんか？

<未完>